

# 社会運動空間における「女性の遊び」

## —台湾ひまわり運動を事例に—

陳怡禎

(日本大学国際関係学部国際教養学科・助教)

### はじめに

本稿の目的は、東アジア現代社会の若者、中でもとりわけ女性が、いかに「趣味」を用いて社会的関係性を構築していくかについて考察することである。その手がかりとして、2014年3月に台湾で起きた「ひまわり運動」という社会運動に注目し、女性参加者によって行われる日常的趣味の実践について検討する。「趣味」とは、一般的に私的時間・空間において実践されるものだとカテゴリー化され、その反面、社会運動は「公的領域」に属しているとされるが、それらの社会運動に参加する女性たちが、戦略的に「私的趣味」を公的領域で実践することによって、趣味縁を中心に結成された女性共同体の可視化をいかに可能にしているのかを分析する。

### 1 研究背景

まず本節では、既存の研究や資料を整理・再構成することによって、本研究の研究対象である台湾の「ひまわり運動」の経緯や特徴を紹介し、本稿が注目する問題の所在を明らかにしたい。

#### 1.1 ひまわり運動とは

台湾のひまわり運動の特徴を簡単に紹介しておこう。ひまわり運動は、90年代以降台湾における最大規模の社会運動だと言われている<sup>1</sup>。その占拠現場は主に二つのエリアに分ける。一つは、「立法院」と呼ばれる台湾の国会議場であり、もう一つは、立法院を囲むような周辺広場や道路である。国会議場を占拠したのが、運動初日に議場に突入した学生運動組織に参加する大学生が多いとみられる。それに対し、周辺道路を占拠したのは、学生を中心に市民も多く参加していたとみられる。また、運動全体を見ると、国会議場は中心的位置を占めており、周辺道路よりマスメディアに注目されていると言える。

つまり、台湾のひまわり運動は「中心一周縁」という同心円のような力関係を持つ構造となっており、警察の弾圧を常に忌憚しているがゆえに、身体や精神的ストレスをたまり続ける中心となる国会議場に比べて、中心からはなれば離れるほど、社会運動特有な緊迫した雰囲気は薄れていくと言える。

しかしながら、ひまわり運動が3週間も長期化できた要因の一つとして、運動空間周縁にいる多くの運動参加者の参加が挙げられるだろう。例えば、議場に最初に突入した学生運動組織のメンバーは、議場を占拠した際に、直ちにSNS掲示板を通して議場占拠の理由や経緯を発信し、ネットユーザーの参加やサポートを呼びかけた。インターネットを通じて情報を知った市民たちが、「議場内の学生を守るために」、翌日より自発的に議場外

<sup>1</sup> ひまわり運動は、2014年の3月18日から4月10日まで、三週間にも及んだ長期化されていた社会運動である。また、ひまわり運動への参加人数は50万人を超えており、台湾の社会運動史上でも稀に見る規模や影響力の大きい社会運動だと評されている。この運動の発端となるのは、2013年6月に中国と台湾の間で、「「两岸服務貿易協議（两岸サービス協定）」が締結されたことに遡る。中国側が80項目、台湾側が64項目（既に27項目が開放済み）のこのサービス貿易部門の相互市場の開放協定という内容について、中国の開放項目が圧倒的に多いため台湾経済に有利であると台湾や中国政府が強調してきたが、その締結までのプロセスが公開されなかったため、協定内容についても経済学者などの専門家から危惧の声も多数挙げられている。この協定内容は、台湾の中小小売業に極めて不利だという意見が多数挙げられ、野党や民間から強い反発の声があがったなか、与党の国会議員は強行的に採決しようとしていた。その採決過程に反発した学生運動組織が、サービス貿易協定の審査を改めてすることを求めていたため、2014年3月17日の夜に「議場を人民に返せ」を叫びながら議場を占拠したことで、ひまわり運動の幕が上がった。

に集結するようになり、ひまわり運動の占拠範囲や参加人数の規模を拡大させていった。すなわち、ひまわり運動の注目度、話題性や影響力は三週間も衰えることなく続けられたのは、議場を占拠していた学生運動組織の努力以外に議場外部にいる不特定多数の運動参加者の存在も大きいと考えられる。

さらに、ひまわり運動現場の様子について説明を加えていこう。ひまわり運動は、「反政府」というシリアスな面を持ちながら、運動の現場は、誰しもが立ち寄ることができる空間になっている。参加者は自由に運動現場に出入りし、気軽に仲間の輪に入ったり抜けたりできる。さらに、その運動現場にはテントが張られていたり、デスクや椅子も置かれたりしていた。また、その周辺に生活用品や食料なども揃えていたため、運動参加者は、片手に本やコーヒーを持ちながら周りとは雑談する場面も珍しくなかった。さらに、ひまわり運動の現場では、授業ボイコットをしていた運動に参加した学生のために、大学の教授が現場まで駆けつけて授業を行うという光景も見られた。また高校生のために大学生が塾を開くという一幕も見られ、また終日座り込みをする参加者のために美容室や食堂などの生活機能も完備されていた<sup>2</sup>。

ひまわり運動を観察し、『革命のつくり方 台湾ひまわり運動——対抗運動の創造性』を出版している研究者・港千尋が現場の様子について、以下のように記述している：

集会に参加しているのは一般の市民や大学生ばかりではない。高校生、中学生の姿もあり、それぞれが自主的な討論会をシートの上で開いている。(中略) ひとこと言えば、机と椅子がないだけで、学内とほぼ同じ環境が路上に成立している。違いと言えば、その同じ場所で大勢の人が食事をしたり、仮眠をとったりしていることだ。短い時間であれ日常的な生活を共にしている。一日だけのデモや数時間で終わる集会との違いは、議論や抗議だけでない日常的営みを通して情動が生まれ、それがゆっくりと広がってゆく点である(2014: 126)。

ひまわり運動は長期間に渡り、特定の街道や広場を占拠して行われる運動であるが、参加者は仕事の合間を縫って一日中のうち数時間だけを割いて、インターネット上で運動現場の状況を確認したり、声援を送ったり、友人と約束して運動現場に足を運んだりするなど、日常生活のリズムを崩さずに日常の生活空間と社会運動空間を行き来していると見られる。

また、上記の港による観察からは、参加者が極力的に「日常的営み」を行っていることもわかる。実際、このような占拠行動によって社会運動空間を生活空間に変貌させようとする社会運動は、2011年に起きた「オキュパイ・ウォールストリート」や「アラブの春」から始まり、新しい形のアクティヴィズムとして世界中の広場に続々と出現してきている。このようなアクティヴィズムは、今まで社会運動とは無縁だったと思われる様々な人々を巻き込むべく、社会運動のシリアスな側面より楽しい側面<sup>3</sup>を前面に出しているといえるだろう。また、社会運動の「日常性」について、富永京子(2017)は、2011年以降、日本で行われる社会運動の担い手である若者の特徴を分析し、彼らは社会運動という組織の同質性に縛られなく、自分の日常の延長として社会運動を位置付けていることを明らかにした：

<sup>2</sup> 筆者は、運動参加者がインターネットに掲載していた写真、動画や、新聞記事を参照しながら、インフォーマントから現場の風景について伺ったほか、2014年3月29日、30日には実際に現場に尋ね、フィールドノートを作成した。

<sup>3</sup> このような新しい社会運動の形については、毛利嘉孝(2003)による、1999年の「シアトルの闘争」に対する考察もある。毛利は、「シアトルの闘争」には、非ヒエラルキー的な組織の形成、「非暴力直接行動」という理念、快楽や享楽の積極的肯定、文化的実践の多用など、従来の社会運動と異なる特徴がみられ、社会運動の一つの転回点として位置付けられることを指摘し、この新しい形の社会運動を「新しい文化＝政治運動」と名付けている。また毛利は、「シアトルの闘争」以降、ダンスパフォーマンス、ミュージック、色とりどりの横断幕やプラカードなど、従来の社会運動では見かけられない様々なカーニバル的なパフォーマンスが、様々な運動で現れてきていると分析している。くわえて渡邊太は、近年の社会運動のユーモアという点に着目し、2008年に北海道で開催されたG8洞爺湖サミットの際の抗議行動について、「ユーモラスなパペット、ジャパニメーション的なコスプレ、思い思いの言葉が書かれた手作り感覚あふれるプラカードがデモ進行を彩る一方で、農協や酪農組合や幟をかかげて肅々と行進し、べつのところではオールドスタイルの革マル派が赤い旗をかかげるなど、多様なスタイルが混じりあう状況だった」と記述し、2000年代以降の現代日本社会における社会運動の行い方の多様性も指摘している。

社会運動に従事する若者たちは、出来事と日常の間に行ったり来たりすることで、日常で抱いた社会への怒りや疑問を路上のスピーチに託すこともあれば、社会運動に参加する中で学んだ振る舞いやこだわりを、自らの日常の営みに反映することもあるだろう（富永 2017: 7）。

富永が指摘していた社会運動の日常性は、台湾のひまわり運動でも観察できる。よって、本稿がとりわけ着目するのは、ひまわり運動に参加している台湾の若者は、社会運動を特別な出来事というより自分自身の日常活動の延長線上にあるものだと捉えているという点である。さらに言えば、彼らは社会運動を特別な「出来事」として捉えていないからこそ、彼らは自然に非日常的空間である社会運動と日常生活空間の境界線を曖昧化し、社会運動に参加しながら、日常的な文化実践を同様にを行うことができるだろう。

## 1. 2 女性参加者はどこに何をしているのか

次に、この小節では、ひまわり運動の参加者構成を明らかにする。

台湾の台北大学の教授陳婉琪（2014）は、ひまわり運動参加者の性別、職業、学歴や年齢などの構成を明らかにするために、社会学部の学生を率いて調査プロジェクトを立ち上げ、2014年3月25日から29日にかけて、議場外の占拠現場でアンケート調査を実施した。年齢層をみれば、平均年齢は28歳であり、なかでも20代の参加率が最も高く66.8%を占めている。また、学歴を見ると、554名の学生のうち、大学生が73%、大学院生が18%を占めている一方、社会人も、76%以上の方が大学以上の学歴を持っている。その結果から、最初は大学生社会運動組織によって行われ始めたひまわり運動は、20代～30代の高学歴層若者を中心に集結したのは大きな特徴であることが分かるだろう。さらに、男女比を見てみれば、有効な989票のうち、女性は51.8%を占め、男女比にはほとんど差がない。

しかしながら、実際の統計を参照すると、参加者の男女比はほとんど差がないにもかかわらず、女性運動参加者の姿はほとんど見えなかった（紀, 2014; 黄, 2015）。例えば、黄佳玉（2015）は、ひまわり運動をテーマに議論を行うシンポジウム<sup>4</sup>において、運動に参加している男性は、一人一人名前が認識されているのに対し、女性は、「社会運動の女神」「（男性参加者の）彼女」等と呼ばれ、名前のない存在となっていると批判している。また、研究者はひまわり運動当時の新聞記事や現場中継配信動画を考察したが、マスメディアに注目されていたのはほとんど男性だったし、運動の方向性を決めていたいわゆる「運動リーダー」的な存在という位置付けを占めている参加者もほとんど男性だった。つまり、ひまわり運動で、社会的な注目を集めたのは、いずれもほとんど男性によるものだと言える。「家父長制」という特質がしばしば強調される（Lau, 1983; 瀬地山, 1996; 落合, 2013）東アジア社会をそのまま複製したとも言えるようなマスキュリンな社会運動空間に参加する女性達は、いったいどこに何をしているかは十分に検討されていないといえよう。

よって本稿は、ひまわり運動の女性参加者を研究対象として考察を進め、社会運動という空間に女性参加者はいかに日常的な趣味を実践している点に注目しながら、彼女らが社会運動空間で自らの日常的な文化実践を行う意味とはなにかを解明していきたい。

## 1. 3 女性と趣味に関する考察

今まで文化研究の領域において、女性による文化実践や、その文化実践を通して構築する女性共同体の関係性は、男性と異なり「私的領域」において実践されるものが多いと指摘されている。そうした研究では、例えば、男性が公共的空間で大人数の友達と一緒に活動するのに対して、女性はプライベートな空間で小人数の友達と

<sup>4</sup> 2015年3月14～15日に開催された「318太陽花運動一週年學術研討會：重構台灣—太陽花的振幅與縱深」シンポジウム記録より。

親密な関係を共有するとされる (Jamieson, 1998=2002; McRobbie, 1976, 1991)。この場合、女性は、もし男性と同行しない場合には、アート、スポーツ、エンターテインメントなどの公的空間に立ち入ることは不可能だと考えられている。つまり、「男=公的な空間、女=私的な空間」と社会的に認知されていることになる。こうした状況が生まれるに当たっては、社会的役割も影響していると考えられている。例えば、Angela McRobbieは1970年代のイギリスにおける少女たちに対する研究から、青春期に、女性は公的な空間を男性に譲って、自分の寝室に戻り、そこで女性同士の親密な関係を発展させると指摘している。McRobbieはこれを「Bedroom Culture」と名付けているが、Susan Murrayもアメリカのテレビネットワーク「ABC」で放映された青少年向けのドラマ番組「My so-called life<sup>5</sup>」の上映中止に対し、ドラマファンの青少年達が中止させないようにインターネット上での書き込みなどの活動を観察する研究で、こうして女性たちが寝室のような男性を排除するプライベートな空間で親密な関係を発展させ、ポピュラー・カルチャーを通じてアイデンティティ・ゲームにはまりこむ、とする (Murray, 2007:45)。こうした研究において女性は、政治などいわゆる公的領域どころか、文化の領域においても、可視化されにくい場所に位置付けられていると考えられる。この点に関して、田中東子は、女性の文化実践を考える際に、①公共空間において男女の間には不均衡の位置関係が存在している点や、②新しい空間での彼女たちの対抗的文化実践を発見していく点という二つの視点を補完する必要があると指摘している (田中 2012:48)。

本稿は、ここまで考察されてきたこのような女性と趣味に関する先行研究を踏まえ、さらに次章から女性が私的空間で日常的に実践してきた文化表現を、女性が排除されがちな社会運動という公的空間でそのまま再現し、行おうとする意図を考察していく。

## 2 ひまわり運動空間における女性

この章では、ひまわり運動空間に行われた女性による「遊び」に着目する。その遊びとは具体的に、ひまわり運動に参加した女性たちが運動のリーダーを「アイドル」に読み替えて、ファンのように追い掛けるという「運動リーダーのアイドル化」である。本章は、まずこうした社会運動空間に行われた女性による文化実践の実態を記述していく。さらに今回の調査においては、多くの台湾人ネットユーザーを持つ「Plurk」や「Facebook」という二つの SNS で調査協力を呼びかけたところ、異なる経歴を持つ八名のインフォーマントにインタビューすることができた。本調査は自由に会話させる雰囲気重視のため、彼女たちのひまわり運動参加経験以外に、普段の生活スタイルや趣味などについても伺った。インタビューを通じて、インフォーマントの間である共通性が明らかになった。それは「日本」、さらに言えば、「日本のサブカルチャー」が、何らかの形式で彼女たちの日常生活に存在していることである。なかでも日本アイドルや、日本の漫画や小説を中心に創作または二次創作された、女性向けに男同士の恋愛関係を描いた「ボーイズラブ (BL)」作品が彼女らの日常的な趣味として多く挙げられている点は注目に値する。

この結果から、本稿がとりわけ注目する「運動リーダーのアイドル化」という女性社会運動参加者による文化実践は、運動に参加する女性の日常生活の趣味の延長線上にあるものだと推測できるだろう。したがって、以下では八名のインフォーマントへのインタビューに基づいて分析を行い、次に挙げる二点を明らかにしたい。まず、社会運動に参加している女性たちは、どのように厳しい抗争と全く異なる空気が持たれる「運動リーダーのアイドル化」という遊びを捉えているかを考察する。さらに彼女たちによる「私的趣味・公的社会運動」「日常・非日常」の領域を曖昧化しようとする行動には、どのような意味が読み取られるかを明らかにしたい。

<sup>5</sup> このドラマは 1994 年から 1995 年にアメリカで放映された、十五歳の主人公 Angela の心理葛藤を描いたドラマであり、同作は青少年層に歓迎されたと見られる。

## 2. 1 調査対象・方法

まず本稿が採用する調査方法について紹介する。本研究は半構造化インタビュー調査法 (Semi-structured interview) に基づき、2015年7月から2016年8月にかけて、台湾現地にひまわり運動に参加していた8名の20～30代女性を対象に行った。インフォーマント自身が指定した場所で、食事会を兼ねてインタビューを行い、あらかじめ筆者が用意した質問事項を設定したうえで、インフォーマントにその回答を求めつつ、彼女らの反応によって柔軟に質問を進めた。

インフォーマントの詳細なプロフィールは以下の「表」のとおりである。インフォーマントA、B、Cは友人関係であるため、彼女らの普段の関係性や会話の雰囲気をつかむために、グループインタビューという形式を採用した。またインフォーマントDは、ひまわり運動の後に日本の研究機関に転職したため、日本のカフェでインタビューを実施した。インフォーマントG、Hの出身地は一緒に共通の友人がいる知り合いであり、同じく日本武道館コンサートを開催した台湾出身の人気バンドを追いかけて訪日していた。彼女が食事会を約束したためその場に同席させてもらい、インタビューを実施した<sup>6</sup>。インフォーマントEは、スケジュールの関係で直接に対面できなかったが、インターネットのテレビ電話を通してインタビューを実施することにした。また、インタビュー場所についても、筆者は東京でのインタビュー調査以外に、全ての場所指定をインフォーマントに一任した。

彼女たちは、自分が日常生活の中でよく通うレストランやカフェを指定した人もいれば、家や職場の近所に指定した人もいた。このような「日常性」も、彼女たちのひまわり運動への参加方式に現れている。例えば、当時に女子大生であったインフォーマントFは、インタビュー場所を大学周辺のカフェに指定していたが、そのカフェが行きつけだという彼女に、研究者は運動参加の経緯について尋ねた。彼女は大学から徒歩圏内の場所に足を運んで、座り込みや寝泊まりでひまわり運動に参加していたと回答した。つまり、彼女にとって、「インタビューを受けること」や「社会運動に参加すること」を特別な出来事として捉えておらず、自分自身の生活リズムを最優先にしながら、インタビューや社会運動などの「出来事」に対応していると考えられるのである。このような「日常性」を最大限に保つ姿勢は、彼女たちがどのようにひまわり運動や雨傘運動に参加しているかを分析するうえで重要なヒントを提示してくれる。

インフォーマント	年代	職業	学歴	出身	インタビュー場所
A	30代	日系企業OL	大学	台湾北部	台北市某レストラン
B	30代	商社OL	大学	台湾北部	台北市某レストラン
C	30代	特許事務所勤務	大学院	台湾中部	台北市某レストラン
D	30代	大学研究員	大学院	台湾北部	日本東京某カフェ
E	20代	病院受付	専門学校	台湾中部	テレビ電話 (Skype)
F	20代	大学生	大学	台湾北部	台北市某大学周辺カフェ
G	30代	会社総務	大学院	台湾南部	日本東京某カフェ
H	30代	書店経営	大学	台湾南部	日本東京某カフェ

表：インフォーマント詳細プロフィール (インタビュー実施期間：2015年7月から2016年8月)

## 2. 2 「社会運動のアイドル」を形作る女性たち

つぎに本節では、ひまわり運動に参加する女性たちが運動リーダーと呼ばれる林飛帆と陳為廷をアイドル化する現象に焦点を当て、その実態を明らかにする。

<sup>6</sup> インフォーマントGの友人も同席していたが、彼女はインフォーマントHとは初対面のため、時々会話に割り込んで発言したがインタビューに不参加と表明したため、調査対象から除外する。

九〇年代以降、台湾の社会運動史上、最大規模と言われるひまわり運動に対して、日に日に注目が高まっていくなか、率先して国会議場を占拠した学生運動組織のメンバーも社会大衆からの注目を集め始めていた。議場を占拠し始めた頃から、学生たちは直ちに自らの専門分野や性格特徴を活かし、医療、物資搬送、翻訳、広報等、幾つかのチームに分けて、それぞれ仕事をし始めた。そのなかで林と陳は、運動のスポークスマンとして、毎日マスメディアからの取材依頼を受けたり、運動の進捗を参加者に報告したりする役割を担っていた。カメラの前の露出が高かったせいか、学生運動組織のメンバーの中でも林と陳は「運動リーダー」と呼ばれ始め、スポットが当てられるようになっていた。なかでも、近年政治に無関心と言われていた若者たちも、彼らに絶大な支持を寄せていたとみられる。

ここで、「運動リーダー」という用語についてあらかじめ断りを入れておきたい。本稿で用いる「運動リーダー」という語彙は、台湾のマスメディアで使われているものである。しかし、近年の社会運動研究においては、現代の社会運動にはカリスマのようなリーダーが存在していないと度々議論されている。例えば、Paolo Gerbaudo (2012) は、ソーシャルメディアを用いて行われる現代の社会運動では、組織は流動的であるゆえに、ソフトかつ対話力があるリーダーシップが重視されるようになったと指摘した。Gerbaudoは、このような特質を「choreographic leadership」と名付けて、従来の意味上での「リーダー」は「振付師」に変わり、人々を社会運動の場へ誘導する役割を担うようになったと主張している。また富永京子(2017)は、現代の社会運動において、若者が自分たちの「組織」的な枠組を過度に主張しない、組織に所属していると積極的に語らないと指摘している。本研究の調査に応じてくれたインフォーマントたちを含めて、多くのひまわり運動参加者が「運動リーダーの発言に少なからず影響されるが、彼らの指示や方針に完全に従うつもりはなかった」と口を揃えているように、ひまわり運動の参加者にとっては、必ずしも“誰がどの組織に従う”といった感覚は持っていなかったと考えられる。

とはいえ、運動リーダーたちは発言するたびにマスメディアに露出していたため、社会運動の参加者を含め、世間から注目されるのも当然なことだろう。このように大いに注目される中、運動リーダーがマスメディアに向けて度々口にした運動趣旨に沿う政治理念だけでなく、彼らの日常生活やファッション、さらに過去の成長エピソードや恋愛事情など、社会運動に関係のない側面も焦点が当てられるようになった。

例えば、当時は大学院生であった林は、ひまわり運動期間中にカメラに向けて発言した際に、常に伊達メガネをかけて緑色のコートに身を纏っていた。その極めて「普通の大学生」らしい格好は、ひまわり運動の規模が拡大していったにつれて注目されるようになった。さらに、このコートも「正義のロングコート」と呼ばれたほどひまわり運動の象徴の一つとなり、飛ぶように売れ、話題となった。林は自分自身のFaceBookに「コートのブランド名についての問い合わせはもうやめて。ひまわり運動が成功を収めた時に僕はブランド名を発表するから」と書き込んだことから、「運動リーダーの着用商品」に対する過熱ぶりが現れている。また、彼らの生い立ちや日常生活、趣味、好んでいるアニメキャラクターがマスメディアで紹介されたり、彼女とのデート場面が週刊誌に撮られるなど、運動リーダーに対する世間の注目度の高さも伺えた。そのほか、彼らが運動現場で姿を現すと、多くの若者が彼らに会うために現場に駆けつけ、写真撮影やサインを求めたり、リーダーたちにプレゼントを贈ったりするという現象も多くみられた。このような現象に対して、マスメディアや政治評論家は「運動リーダーアイドル化<sup>7</sup>」と評し、賛否両論の意見を寄せていたが、なぜリーダーたちは社会運動のアイドルと称されたのか。これを理解するために、まずは台湾における「アイドル<sup>8</sup>」という言葉がどのように理解されているかを説明しなくてはならない。

香月孝史(2014)は、日本のアイドルについての語られ方の多義性に注目し、従来日本社会で使用されてきた

<sup>7</sup> 例えば、台湾の大手テレビ局 TVBS は、「林飛帆、陳為廷 ひまわり運動の二人の新星（林飛帆、陳為廷 太陽花學運創兩新星）」を題に、林と陳を「新しいアイドル」と紹介していた。

<https://news.tvbs.com.tw/life/527547> 最終アクセス 2020.2.20

<sup>8</sup> 「アイドル」の中国語は「偶像」と書かれている。

「アイドル」という言葉に託された意義を検討し、実際に日本社会で共有される「アイドル」という言葉の語義設定が混在して用いられていると論じている。とはいえ、実際には芸能ジャンルという領域で活躍している「アイドル」は、最も世間に想起されやすい存在であるとも指摘している<sup>9</sup>。その一方で、日本文化を深く受容する台湾においても、「アイドル」と呼び慣わされる存在は、日本と同じく芸能ジャンルにおける「アイドル」だろう。また簡妙如(2003)は、台湾におけるアイドルについて「清純」、「親近感」、「年の差が近い」、「清く正しい品行」というイメージをあげているが、こういった性格の想定対象も「芸能ジャンルとしてのアイドル」である。つまり、台湾においてもっとも「アイドル」という語彙が指し示すのは、日本と同様、等身大で親近感を持つ芸能ジャンルとしてのアイドルであり、この意味において消費されていると言える。

前述した香月の日本アイドルのあり方に対する考察、そして台湾社会における「アイドル」の語られ方を踏まえた上で、つぎに運動リーダーと呼ばれる林飛帆・陳為廷が、なぜアイドルとして消費されているのかを検討していきたい。彼らは当時、現役の名門大学院生で、趣味や言葉遣いも普通の大学生と変わらず、さらに、端正な容姿が加わり、前述した台湾社会で求められている「アイドル」の特質を十分に備えているといえる。こうして本来芸能ジャンルに属してはいない運動リーダーが持っている特質が、台湾社会で共有されるアイドルに対する言説の水準を達しているからこそ、社会運動のアイドルとして扱われても、あまり違和感が感じられないのではないだろうか。

しかし、これだけではなぜ社会運動参加者の女性たちが、彼ら運動リーダーに「アイドル」性を見出しているのかが判然としない。そこで、さらに運動参加者の女性が、運動リーダーに「どのような」アイドル的性質を読み取っているのかについて精査していきたい。今回、研究者がインフォーマントに運動リーダーをアイドルに読み替えて消費する理由について尋ねた際、インフォーマントは「(彼らの)話に説得力がある」「強い意志を持っている」「リーダーシップ」「誠実」「笑顔」「可愛さ」「子供っぽさ」など、リーダーたちの魅力を挙げていた。前者の四点について、社会運動が進行しているときの「フロントステージ<sup>10</sup>」において、インフォーマントが運動リーダーの言動に読み取った特質だと言える。しかしながら、彼女たちはなぜ、後者の「笑顔」「可愛さ」「子供っぽさ」といった四つの要素を投射したのだろうか。

ひまわり運動は、数時間や一時期のデモでなく、長期にわたって街道などの空間を占拠しているため、運動参加者は、自由に運動空間に出入りすることができるものの、四六時中、同じ空間や時間を共有しているといえる。また、ひまわり運動の様子を多くの人に知ってもらうために、多くの運動参加者はソーシャルメディアを活用し、占拠現場の様子をインターネットで配信している。そのため、運動リーダーを含めて占拠された空間にいるすべての参加者は、社会運動を行う「フロントステージ」で見せる「表の顔」や、それ以外の時を指す「バックステージ」で見せる「裏の顔」両方を、参加者たちだけでなく、社会運動に関心を持つ視聴者に見せている。そのため長時間の占拠によって「フロントステージ/バックステージ」「社会運動/日常生活」「表/裏」の境界線の曖昧化が、運動リーダーと参加者、運動に関心を持つ人との間に、絶え間なくコミュニケーションを行わせ、コミットメントを強化していくと考えられる。さらに、社会運動に参加している女性たちも、社会運動のバックステージを覗くことを通して、厳しい抗争の場では本来読み取りにくい運動リーダーの「かわいさ」や「子供っぽさ」など親しみやすい特質を見出すことができたと考えられる。しかしながら、ここで注目しなければならないのが、女性たちに挙げられた運動リーダーの魅力は、すべて彼女ら自分自身の「好み」に合わせたものだという点である。

例えば、インフォーマントFは、追っかけはしないが運動リーダーの日常生活を観察することが好きだから、自分は確実に彼らの「ファン」であろうと述べている。彼女は運動リーダーが多くの運動参加者にアイドル化

<sup>9</sup> 香月孝史,2014,『「アイドル」の読み方: 混乱する「語り」を問う』を参照。

<sup>10</sup> 「フロントステージ」という言葉は、富永京子が日本の社会運動について分析し、出来事としての「デモ、ロビイング、学習会、選挙活動、署名運動」という社会運動の本番について説明する際に作った言葉である。ここではこのような富永の言葉を借りる。また、富永は社会運動の準備・設営段階を「バックステージ」を呼ぶが、本研究では社会運動の準備段階を含めて、運動本番以外の時間を「バックステージ」を呼ぶことにする。

される原因について、以下のように考えている：

皆（調査者注：運動参加者を指す）は、林くんが頭脳派で、陳は武闘派だって言っているよね（笑）。彼らがアイドルになれた最大な理由は、彼らには「ストーリー性」があると思う。特に、陳くんの人生は波瀾万丈だし、性格もすごく鮮明だから、色んなストーリーを読める。例えば、三月二四日<sup>11</sup>に、陳くんは泣いたじゃん。彼の泣き顔を見たら、なぜか彼にも悲しい過去があったなどと自然に妄想を始めちゃうよね。（インフォーマントF, 20代, 大学生）

ここで「運動リーダーにはストーリー性」というインフォーマントの考え方に注目してみたい。例えば彼女は、陳の泣き顔を見る時に、その涙は、社会運動に関連するものではなく「彼にも悲しい過去があった」と想像したと述べている。つまり彼女は陳の日常的な言動に自らが創造した物語を投射していると言えるだろう。こうした点からも、彼女たちが従来の社会運動参加者のように受動的に「カリスマ」に追随するのではなく、能動的に運動リーダーから自分の想像や理想に沿った特質や物語を見出し、「アイドル」像を形作っていると考えられるのである。

ここまで、ひまわり運動の女性参加者は能動的に社会運動の「アイドル」を作り上げたことを考察してきた。実際に、こうした「運動リーダーのアイドル化」という文化実践をする女性たち自身にとって、これはただの「遊び」ではない。例えば、インフォーマントEが以下のように発言し、運動リーダーのファンだと表明している：

私は、陳為廷の大ファンです。陳くんのファンだっずっと周りに言っている。陳くんに会う為に、陳くんの地元やデモなど、彼は姿が現れそうな場所にも行ったよ。（陳くんがアイドル化されたのが）悪いことじゃないと思う。だってその時はとりあえず「人が参加してくれる」ことが一番大事だからね。アイドルを追っかける為にデモに集まる人も多ければ多いほどいいことだと思う。（インフォーマントE, 20代, 病院受付）

上記の発言から、インフォーマントEは、自らを運動参加者や運動リーダーの追随者ではなく、「ファン」という言葉を使って自称し、さらに運動リーダーに会えることをモチベーションとして社会運動に参加していることがわかった。さらに、インフォーマントEは、運動リーダーの健康状況に気を使ってサプリメントをプレゼントしたりし、隙をみて運動リーダーに声をかけたりし、自らの存在を覚えてもらったと述べている。彼女は「ファン」として、積極的にリーダーに関与しようとしているが、彼女にとって運動リーダーを目当てに社会運動に参加することも、運動の盛り上がり貢献すると考え、自らの「追っかけ」行動を評価している。さらに言えば、彼女らは、運動リーダーをアイドルとして読み替えて追っかける「ファン行動」を、ひまわり運動を多くの人に認識してもらえる「戦略」の一環として実践していると言えるのである。

つまり、彼女たちは運動リーダーに自分自身の理想を反映させたストーリーを見出し、まるで芸能界にいる人物のように「アイドル化」という「遊び」に興じている。しかしながら、それは単に「遊び=アイドルという読み替え」行為に留まらず、自分自身を運動リーダーの「ファン」であると自称することによって、自身の行動（応援や追っかけ行為）が、間接的に社会運動の盛り上がり貢献するのだという意味づけも行っていることが明らかとなった。このように、ひまわり運動に参加する女性たちは社会運動という「公的」な空間に「遊び=アイドル化」という、いわば「私的」趣味と考えられてきた要素を持ち込み、その営みを通じて「ファン」というアイデンティティを獲得したり、さらにはファン活動に“社会運動への貢献”というポジテ

<sup>11</sup> この日に、ある拠点をあらたに占拠しようとする学生が警察に逮捕されたことを受けて、林と陳をはじめ、議場を占拠している学生が記者会見を開き、警察による暴力に抗議した。



イブな意味づけを与えていたということである。以上の分析から、女性の社会運動参加に関する新たな知見を提出できたと考える。

## おわりに

本稿は事例研究として、ひまわり運動空間における、女性参加者の趣味的実践について考察した。全体の流れを最後にまとめたうえで、今後の課題について述べたい。まず、女性は男性が支配し主導権を握ることを前提とされている社会運動空間で、日常的文化実践である「アイドル・ファン活動」を行っていたことである。彼女たちは、能動的に社会運動リーダーをアイドルに読み替えて消費し、その文化実践に高い評価を付与していることがわかった。つまり、ひまわり運動に参加している女性たちは、余暇の時間に私的空間で実践すると思われる「趣味」を公的社会運動空間において実践し、主体的、積極的に公的空間での発言権を確保しようとしていたのである。本稿は、こうした彼女たちの実践を「趣味実践」を一種の準拠点とした「二重の抵抗」と結論づけたい。一つめの抵抗とは、元々男性が優位を占める趣味や文化実践<sup>12</sup>という領域における、女性による趣味共同体を可視化させようとする点である。第二の抵抗とは、彼女たちが自らの趣味や遊びを武器として用い、男性支配の社会運動という空間に参入するという点である。

最後に今後の課題を述べる。本論ではここまで、女性参加者が自身の趣味的文化実践をアプローチとしながら、その「遊び」が社会運動に貢献していると述べた。しかし、以下のインフォーマントの主張には、こうした「運動リーダーのアイドル化」という実践へのジレンマも観察された。すなわち、アイドル化が社会運動への貢献だけでなく、マイナスの作用ももたらす可能性があるという、認識である。

例えば、以下のようなインフォーマントAとCの会話がある：

インフォーマントA: 私は、運動リーダーがアイドル化されることに対して、肯定的な意見を持っている。だって、こうじゃないと……

インフォーマントC: こうじゃないと群衆の関心を集められないもんね。でも、私は「アイドル化」が二つの効果をもたらしたと思うんだ。よりたくさんの運動参加者を募ることは間違いない。でも逆にこの運動に反対する側からすればこれも我々運動参加者を攻撃する口実となる。例えば、運動に反対する側は「リーダーを追っかける人は何も考えてない、リーダーがかっこいいとだけ思っただけ」という口実でこの運動を非正当化しようとするかもしれない。これは少し心配する。(インフォーマントA, 30代, OL、インフォーマントC, 30代, OL)

つまり、「アイドル化」をする運動参加者の実践そのものが、運動に敵対する人びとにとって「社会運動の非正当化」の根拠や材料を与えてしまうのではないか、という再帰的視線が存在するということである。この会話から、彼女たちは運動リーダーの社会運動家という一面以外の顔に興味を示し、リーダーをアイドル化して楽しみながらも、実際にはつねに「外部」の眼差しを気にながら、自分自身の「遊び」に対する規範を設けていると推察できる。こうした点については稿を改めて考察することとしたい。

## 【参考文献】

伊藤昌亮, 2012, 『デモのメディア論—社会運動社会のゆくえ』, 筑摩書房

落合恵美子編, 2013, 『親密圏と公共圏の再編成 アジア近代からの問い』 京都大学学術出版会

簡妙如, 2003, 『審美現代性的轉向；兼論 80 年代台灣流行音樂的現代性寓言』, 2003 文化研究學會年會

<sup>12</sup> 例えば、田中 (2012) は、日本において、1980 年代後半から語られてきた「オタク文化」をはじめに、実際多くのサブカルチャー研究では、無意識的にその文化は男性に属するものを前提に議論を進めてきたと批判している。

- 香月孝史, 2014, 『「アイドル」の読み方: 混乱する「語り」を問う』 青弓社
- 五野井郁夫, 2012, 『「デモ」とは何か 変貌する直接民主主義』 NHK 出版
- 黄恐龍, 2014, 『野生的太陽花』 玉山社
- Jamieson, Lynn, 1998, "Personal Relationships in Modern Societies", Blackwell. (=2002, 蔡明璋訳, 『親密関係 現代社会的私人関係』, 群學出版有限公司)
- 瀬地山角, 1996, 『東アジアの家父長制—ジェンダーの比較社会学』 勁草書房
- 田中東子, 2012, 『メディア文化とジェンダーの政治学—第三波フェミニズムの視点から』 世界思想社
- 陳婉琪, 2014, 「誰來「學運」? 太陽花學運靜坐參與者的基本人口圖象」 巷仔口社會學, (2020年2月23日取得 <http://twstreetcorner.org/2014/06/30/chenwanchi-2/>)
- 富永京子, 2017, 『社会運動と若者 : 日常と出来事を往還する政治』 ナカニシヤ出版
- Paolo Gerbaudo, 2012, "Tweets and the Streets: Social Media and Contemporary Activism", Pluto Press
- 福島香織, 2016, 『SEALDs と東アジア若者デモってなんだ!』 イースト新書
- McRobbie, Angela and Garber, Jenny, 1977, "Girls and Subcultures." Stuart Hall and Tony Jefferson, eds. Resistance Through Rituals: Youth Subcultures in Post-War Britain, London: Hutchinson, 209-222.
- McRobbie, Angela, 1991, "FEMINISM AND YOUTH CULTURE From Jackie to Just Seventeen", MACMILLAN PRESS LTD.
- 港千尋, 2014, 『革命のつくり方 台湾ひまわり運動——対抗運動の創造性』 インスクリプト
- Murray, Susan, 2007, "Saving Our So-called Lives: Girl Fandom, Adolescent Subjectivity, and My So-called Life", Michele Byers, David Lavery, 2007, 『Dear Angela: remembering My so-called life』, Lexington Books
- 毛利嘉孝, 2003, 『文化=政治 グローバリゼーション時代の空間叛乱』 月曜社
- Lau Siu-Kai, 1983, "Society and Politics in Hong Kong", Hong Kong: Chinese University Press
- 渡邊太, 2012, 『愛とユーモアの社会運動論』 北大路書房